

葛飾区史編さんだより

261021

Vol.4

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 8 月 24 日 日曜日 午前
10 時から、堀切地区センターにて
「昭和の葛飾を伺う会」が開催されま
した。かつての堀切・小谷野を中心
とした方々が大勢お集まりになり、お
話を聞かせていただきました。



花の町

堀切といえば花菖蒲。堀切菖蒲園の賑わいは区民にあまり知られていません。この菖蒲園の歴史は江戸時代に遡ります。

しかし堀切で花菖蒲とは別に、畑での花栽培が盛んであったことは、あまり知られていません。堀切の農家では矢車草、キンセンカ、グラジオラスなどを作り、東京都心の市場に出荷していたそうです。チューリップは地質に合わなかったらしく、葉先が赤くなってしまったと花栽培をしていた人たちは語ります。こうした花々を生産者はダモノと呼んでいます。蘭などの高い花ではなく庶民が日常的に仏壇などに飾る花のことを指すようです。

また、市場とは別に行商で花を売りに行く人もいました。大八車などを利用して、代の部分にきれいに花を飾り付けて浅草、神田などに売りに行きます。これを花車といいました。売りに行く日は、毎月 1 日と 15 日を目安にしていました。1 日、15 日は東京の町の人たちは、仏壇に花を飾る習慣がありそれを目当てにいったそうです。

堀切で花栽培が盛んだったのは大正時代までで、昭和になると都市化して土地が少なくなり花栽培が出来るところも少なくなりました。そこで花の行商をしていた人は、市場から買って売り歩くという人も現れました。

こうした花栽培、花売りの伝統を踏まえて、堀切から全国規模の園芸業者が誕生しました。現在、東京都立日比谷公園を拠点として全国的に花を販売している日比谷花壇も、もとは堀切で花栽培、花売りをしていました。

日比谷花壇のホームページによると、1872(明治 5)年、葛飾区堀切で創業となっていますから、明治時代の初めには花売りを始めていたことがわかります。

日比谷花壇は太平洋戦争後、昭和 25 年ごろから東京都の要請を受けて日比谷公園を拠点にし、昭和天皇の大喪の礼など国家的な行事の受注も多くあります。

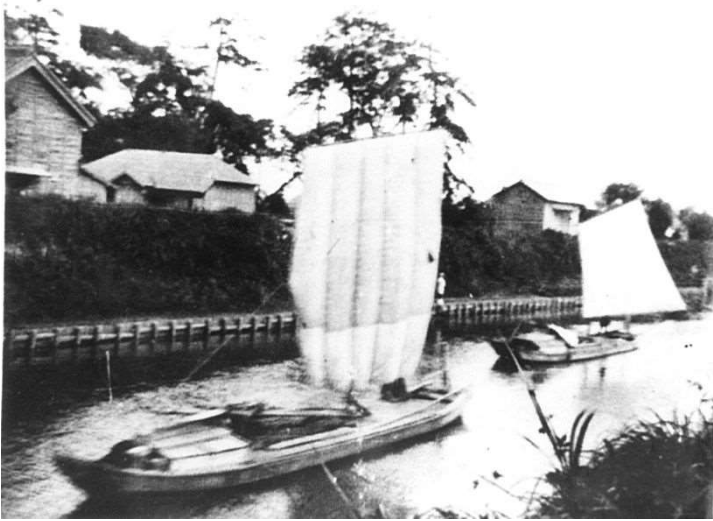
桃祭り

明治生まれの方から小谷野の桃祭りの話を聞いたことがあります。

小谷野の稲荷神社は 9 月に祭りがあり 5 年に一度ある大祭のときは芝居が出たりして賑やかでした。しかし、この大祭にも増して楽しみにしていたのが 7 月 19 日に行われた桃祭りという祭りでした。この日は稲荷神社の獅子が村の中を一周します。そのときに桃を配ることから桃祭りという名が付けられました。

この日の朝、祭りの役員は千住の市場に御膳籠(婚礼のときのごちそうを運ぶ籠)を持って桃の買い出しに行きます。この桃を神社に参拝に来た人たちに配ります。桃は邪気を祓う食べ物といわれていて、この桃祭りは夏の盛りを迎えるころの祭りとして親しまれていました。

綾瀬川での魚釣りなど



現在はコンクリートの切り立った護岸が岸边と水面の間を隔てている綾瀬川ですが、昭和 20 年代の写真を見ると、人と水辺の間がとても近いように感じられます。

「昭和の葛飾を何う会」でも綾瀬川で泳いだ話や魚を取った話が多数出ました。

まず、綾瀬川や荒川が引き潮になったときに、ハゼ釣りの餌として知られるゴカイを掘る人が多かったという話がありました。小谷野(現堀切 4 丁目)にはゴカイを掘ることがアルバイトのようになっていました。

水害の記憶



昭和 22 年のキャスリン台風の記憶は現在もはっきり記憶している方が大勢おられます。今から 70 年程も前のことですが、印象がよほど強かったものなのでしょう。

堀切に水が来たのは桜土手が決壊した 9 月 20 日の翌日のことだったようです。すでに桜土手決壊、ついで中川の亀有付近が決壊したことは堀切の人たちも知っていました。畳などを上げ、それなりの備えをしていましたが、朝になっても水が来ないのでどうしたことかとお花茶屋駅付近まで見に行った人もいたそうです。

その日の午前中には水がひたひたと来たかとおもうと、そのあとは急激に、怒涛のような勢いで水が押し寄せて来ました。堀切の人たちは京成線の線路などに逃げました。小谷野の人たちは荒川の土手に逃げました。

当時はまだ食糧事情が悪く、パンの配給もあったのですが、割ってみると糸を引くようなパンだったのを覚えている人がいました。

柄の短い万能(馬鍬)を持って潮が引いたときにゴカイを掘ります。このゴカイは堀切にあった毛塚さんという釣具屋さんが最終的に買ってくれたそうです。

また、荒川ではこのゴカイを使ったハゼ釣りが盛んに行われていました。ハゼを釣ることは遊びの一種ではありましたが、昭和 30 年代までは、食糧を得るために一生懸命に釣ったそうです。荒川では、ハゼ釣りをする人たち同士の肩と肩が触れるような混み具合だったということです。

また、荒川や綾瀬川とは直接関係がありませんが堀切には釣具の錘を作る工場がありました。

また、昭和 17 年生まれの方が子供のころは綾瀬川では普通に泳ぐことが出来ました。京成線の鉄橋から飛び込みをすることが出来ると、周りからヒーローの扱いを受けたようです。

次第に、綾瀬川の水が汚れ、釣りや水泳が出来なくなったのは、沿岸に多くの工場が立ち並び、廃液を直接流すようになった昭和 30 年代の半ば過ぎからでした。



ポンポン蒸気船

綾瀬川と浅草を結ぶ蒸気船が通っていたことがありました。堀切の人たちは「ポンポン蒸気」とか「一銭蒸気」とか呼んでいました。

小菅の竹内昌三さんの調査によると、この蒸気船は「帝都急行汽船」といって隅田川の吾妻橋から隅田水門を経て荒川に入り、綾瀬水門を通過して綾瀬川に入ります。水戸橋を経て花畑運河を通り、最終的には現在の八潮市の潮止橋まで運航した、30 人程度が乗れる船だったそうです。